

約束の地カナン Paradise for Some

あの素晴らしい夕焼けをもう一度
Échos de l'enfance au bord de la Méditerranée

バビヤールの黒い闇 学校

三度目のスラバヤセヌ川：土砂降りの「晴れ舞台」
Unforgettable scenery バルサケルメス島と沙漠の風景

“Movin’ me down the highway” ブレニム・パレス

フェオドシア、グリーンランディア 南仏エズ

忘れられない……でも二度と見たくもない

女川の記憶と2111年の世界 指導教員の研究室の扉

Un décor de Western dans une île de l’Atlantique

忘れられない風景

井の中の蛙大海を知る。

敦煌の鳴沙山

地球に降り立ったエイリアン

広島 (二〇二四年六月)

四角い空

執筆者一覧 (五十音順)

外国語学部フランス語学科

伊藤 達也

世界教養学部世界教養学科

ヴァミューレン 服部 美香

外国語学部英米語学科

上田 功

世界教養学部世界教養学科

エリス 俊子

教職センター

大石 益美

外国語学部英米語学科

岡田 新

世界共生学部世界共生学科

小野 展克

名古屋外国語大学学長

亀山 郁夫

現代国際学部国際教養学科

後藤 希望

外国語学部中国語学科

小堀 慎悟

現代国際学部国際教養学科

城月 雅大

教職センター

竹下 裕隆

世界共生学部世界共生学科

地田 徹朗

世界教養学部世界教養学科

長畑 明利

世界教養学部世界教養学科

沼野 充義

現代国際学部国際教養学科

野川 眞一郎

外国語学部中国語学科

船越 達志

外国語学部英米語学科

真崎 翔

世界共生学部世界共生学科

弓削 雅人

現代国際学部現代英語学科

吉見 かおる

外国語学部中国語学科

黎 敏

現代国際学部現代英語学科

渡邊 克昭

言語教育開発センター

Yasutaka Imai

外国語学部フランス語学科

Annequin Laurent

外国語学部フランス語学科

Jérôme Paccoud

外国語学部英米語学科

Philip Anthony Rush

窓の向こう側

山奥の、その先に……

Women’s Football on the Rise

南仏エズ

伊藤達也

同じフランスと言っても、南仏はパリとは別の世界と言ってよいだろう。あくまでも人間中心に設計されているパリに対して、地中海沿岸に点在する、フェニキアやギリシアの入植によって作り出された数々の港町は、剥き出しの石灰岩が露出する土壌の間に人間が住んでいるような印象を与え、ニースに近い海岸に位置し、海からすぐ四百メートル超の崖が聳え立つ特異な地形のエズは、サラセン人の侵入を防ぐために、中世以来、石造りの路地を垂直方向に張り巡らせ、現在では南仏でも屈指の景観を誇る街となっている。

南仏の海岸沿いの山壁には高さの違う何本かの道路が水平に敷かれているが、エズの街は縦に広がっている、街を訪れる者は、山の中腹のパス通りで降り、表示に従って狭い街路を登ることになる、街の教会を抜け、その頂上付近にある公園の展望台に立つと、オレンジ色の素焼きの屋根とコントラストをなす雲ひとつない紺碧の空、眼下にはその色をさらに濃厚にした群青の地中海が降り注ぐ太陽の光をきらきらと跳ね返しながら水平線の彼方にまで広がっている。

崖の下の海に至る道は「ニーチェの小道」と名付けられている。中世南仏の吟遊詩人トルバドルの「悦ばしい知」にタイトルを借りたニーチェの著作はこのエズでの散歩から着想された。ゲルマン人はヨーロッパの南を発見すると正気ではいられなくなるようで、エズにある「黄金の山羊」という星付きレストランは、かつてスウェーデンの王家が別荘として使用していた。そして「ギリシア人たちは表層のであった。深さによって」と書くニーチェは南仏に古代ギリシアを重ねていた。

ギャラリーや土産物屋の並ぶ道を下り、バス通りもさらに下り海岸に至ると、突如として静かな入江が現れる。そこに至るまでは文字通りの砂利道を下っていかねばならないのだが、その苦労を経た者だけに、極上の小さな水辺が提供されるのだ。山と海を併せ持つこの街を上から下まで知るための歩行こそが、エズの街を忘れ難いものにする。

(いとう たつや)

三度目のスラバヤ

ヴァミューレン服部美香

縁がある土地というのがあるのであれば、思い当たる場所は三か所ある。ロサンゼルスとシドニー、そしてスラバヤ。私が生まれたのは経済白書に「もはや戦後ではない」と書かれてからかなりたつてのことなのであるが、スラバヤとの縁は間接的な戦争の記憶と共に私の中に築かれている。

スラバヤをはじめて意識したのは仕事がつきかかった。以前、あるドキュメンタリー番組で使う資料の翻訳の仕事をしていた。マイクロフィルムに残っている東京裁判の記録を目を凝らしながら読み、何度も地図と照らし合わせながら作業を進めた。「スラバヤ」「小スンダ」で起こった事件についてだった。戦争が日常であった当時の様子が目に浮かび、想像上ではあるものの忘れられない光景となった。それからしばらくして、写真家の知人の通訳を兼ねて元日本海軍の方にインタビュする機会があった。その方の乗っていた駆逐艦「敷波」はスラバヤで空襲に遭った後に、米潜水艦「グロウラー」の雷撃を受けた。三日間、海に漂流後、無事に救助されたというのだ。三重県の田舎の少年が海軍に入隊し、無事に帰還するまでの話に圧倒され、インタビュワーにもかかわらず、涙を抑えることができなかった。この方はそれまで何度もインタビュを受けてきたとおっしゃった。そのたびにグロウラーがどうなったのかジャーナリストらに聞いたのだが、返事をもらえなかったことがあったそうだ。グロウラーの乗務員の情報が写真と共に公開されていたので、お知らせしたところ、大変喜ばれた。インドネシアでも日本でもアメリカでも、そして世界の至る所で、「国」のためにどれほど多くの命が犠牲になったのかと思うと折るような気持ちになった。

そして、昨年、社会学会がスラバヤの大学で開催され、シンガポール経由で空路でスラバヤに到着した。当時、こんな遠くまで船で移動していたのかと東京裁判の資料に載っていた方々や元海軍の方に思いを馳せた。発表はうまくいき、インドネシアの大学の先生方から声をかけていただいた。この縁をうまく繋げることができればこんなうれしいことはない。

(づあみゅーれん はっとり みか)

約束の地カナン

上田 功



ヨルダン川はガリラヤ湖から流れ出て南下し、死海へと果てる。死海は南北に伸びる深い地溝帯の一部をなし、海拔は低く、マイナス四〇〇メートルにもなる。東にはアバリム山脈が扇のように聳え立ち、地中海からの風は、これにぶつかり、死海の西の平野部には恵みの雨をもたらし、山脈を越えると乾燥した砂漠へと吹き下る。

十年ほど前に、学会や校務で連続して中近東諸国を訪れる時期があり、ヨルダンにも行く機会があった。当時の勤務校の国際交流の仕事で、学生のアラビア語研修先として適当な教育機関を探しており、ヨルダン大学を訪問したのである。当時の交流先エジプトは、政情不安が続いていた。仕事が終わる、時間があつたので、首都アンマンから、死海や、ヨハネがイエス・キリストに洗礼を受けたとされるヨルダン川河畔の聖地を訪ねた。その帰りにアバリム山脈の主峰ネボ山頂の展望所に立ち寄った。

旧約聖書によると、モーセはエジプトからイスラエルの民を率いて荒野を横切り、過酷な旅を続けてこの地にたどり着いた。しかし、艱難辛苦を乗り越えたモーセは、目的地カナンを目の前にして亡くなる。それが神の意志であつた。しかし、死する直前に、モーセは神の言葉に従い、ネボ山に登り、約束の地を見渡した。旧約聖書申命記第三十四章には次のように書かれている。「而してエホバかれに言いたまひけるは我がアブラハム、イサク、ヤコブにむかひ之を汝の子孫にあたへんと言ひて誓ひたりし地は是なり我なんぢをして之を汝の目に観ることを得せしむ然れど汝は彼處に涉りゆくことを得ずと」〔舊新約聖書〕日本聖書協会 一九八二年

ネボ山の頂上からは、左下に死海、正面にはイエリコの町、そしてエルサレムまでもが遠望できた。折しも雲が切れて、何条かの光が雲間から下界に射してきた。陽は鈍い光の結晶となつて、さらさらと地上に舞い降りてくる。モーセは約束の地カナンにたどり着くことはかなわなかった。しかし神は最後に、イスラエルの民がこれから導かれ行く、乳と蜜の流れる約束の地を彼に見せたのである。その地が眼下に広がっていた。

(うへだ いさお)

窓の向こう側

エリス 俊子

風景の感受の仕方は、そのときの心の様態とあまりにも深くかわつていて、それを思い起こし、吐露することには心の皮を剥ぐような恥じらいを感じる。「思い出の旋律」は、気がつけば頭の中を流れ出していたのだけれど、「忘れられない風景」は、なかなか自然に出てきてくれなかった。むろん、思い出す風景はいくつもの脳裏をよぎる。自分にとつて大事だった時間はすべて風景をともしなっているのだから。そのときの誰かの笑顔、手の温もり、声の響き、あるいは心の疼き、途方もない喪失感などが次々と絡んできて、風景をかたちづくっていく。走馬灯のように巡る無数の風景は、今の私を生かしてくれる、自分の生の日々そのものである。

そうした数々の風景を思い巡らせているうちに、何度も戻ってくる一つの情景があつた。風景という言葉にはそぐわない、ある視覚化されたかたちにはすぎない。冬の日、都会のアパートの四階。その一室の窓の外をほんやりと眺めていた。グレーの木枠に囲まれた大きな窓があつて、外は曇天。窓の向こう側には隣のビルがある。ブラウンストーンでできたその建物との距離は十メートルあるかないかで、壁一面しか見えない。帰らぬ人待ちながら、無言の壁と向き合っていた時間。

この情景は、いつしか固定された心象風景となつて、私は何度もここに立ち返る。一人であること。そして誰もが一人であること。向こうの建物の住人たちの姿は見え、階下の喧騒も遠くに聞こえる。生きていることがこんなに寂しいのだと思ひながら、窓の外の無言の壁は私の想いを響かせて、優しく語りかけていた。

すでに四十年近く前のこと。そんな壁のある街に惹かれて最近も訪れてみたのだが、そのアパートがどこにあったのか、探すすべもなかった。都会は相変わらず無数の人間たちを抱え、みな忙しそうに、あるいは退屈そうに、道を行き交つていく。そして私も、日々、その人たちに混じって、無名性のなかを、林立する建造物の壁の狭間の小道を歩き、一人であることに安堵の感さえ覚えていた。

(えりす としこ)

学校

大石益美

幼いころ父と歩いた田んぼ道、高台にあった高校の音楽室から見たボブ・ディランとその向こうの街並み、定期演奏会のステージから見た客席、西伊豆の磯から見た大海原、サッカラの階段ピラミッド……。一生忘れないであろう風景はいくつもあがあるが、今、一番強く心に残っているのは、高校教員としての最後の学校祭で見た、グラウンドに並ぶ生徒たちの姿である。その学校のグラウンドは広く、斜面を利用したステージが、観客スタンドの中央、グラウンドから階段を十段上がったところにあった。朝礼台の三倍の高さがあり、そこからはグラウンドの隅々まで見渡すことができる。学校祭の最終日は体育祭。その最後にステージに立って話した私は、色とりどりの団Tシャツを着て、充実した顔で誇らしげにこちらを見ている全校生徒の前に、胸が詰まり、言葉を継げなくなった。

年度当初に、学校祭は三年ぶりにコロナに係る制限を廃して行うことを決めたものの、コロナ前の学校祭を知る生徒は一人もいない。三日間のプログラムを縦割りの団対抗で行うが、リーダーの三年生は暗中模索、生徒会役員や団長たちが侃々諤々、試行錯誤を繰り返しながら新たな伝統を創り上げていく。その一生懸命な姿を見て胸が熱くなるとともに、未来の社会を創るに相応しいエネルギーを感じた。そのような状況を経ての学校祭。閉会式では全力を出し切った全校生徒が順位発表に一喜一憂する。表彰される団のリーダーはグラウンドからステージまで階段を駆け上がり、優勝旗や盾、賞状などを受け取って歓喜の雄叫びをあげ、グラウンドの生徒たちがそれに応える。昔ながらの光景だ。

その後、校長講評として生徒や先生の頑張りを称賛し、そういう人たちがいるこの学校を誇りに思うと言った瞬間、私の中にこみ上げるものがあった。突然の沈黙を生徒はどのように受け取ったか分からない。が、私は生徒たちのキラキラした目とそれを包み込む穏やかな学校の空気を感じながら、私自身が、三十八年間、すてきな生徒や先生とともに楽しく仕事をしていた幸せを噛みしめ、この光景を一生忘れないよう深く心に刻んだ。

(おおいし ますみ)

ブレニム・パレス

岡田 新

ブレニム・パレスはオックスフォードの北に位置する。ブレニムはダンユー川のはとりにある古戦場の名。十七世紀にイギリスは名誉革命を経験した。カソリックの国王を追放し、オランダから何の血縁もないオランダ公ウィリアムを国王に招聘したプロテスタントによるクーデターである。ウィリアムは、オランダ軍を率いイギリスに上陸した。だが国王ジェームス二世が恐怖のため逃亡し、血を流すことなくイギリスの国王におさまった。しかしその後カソリック諸国は、正当な王位継承者を追放したイギリスに襲いかかる。スチュワート王朝の発祥の地であったスコットランド、カソリックの牙城アイルランドもフランスと結んで反乱。以後百年にわたって、イギリスはフランスを中心とするカソリックと地球規模で戦い続ける。その世界大戦の最初の戦いがスベイン王位継承戦争であり、これに決着をつけたのがブレニムの戦である。ジョン・チャーチル率いるイギリス軍は決定的勝利を納め、ジブラルタルなど今に至る戦果を手にした。感激したアン女王がチャーチル家に贈ったのが、このブレニムパレスである。



門を入ると広大な湖があり、対岸に美しい宮殿が待る。対岸には、ブレニムの戦勝を記念した高い碑がそびえる。イングランドで一番美しい景色などと呼ばれるこの地で、ウィンストン・チャーチルは生まれ育ち、プロポーズをした。オックスフォードからバスで二十分余り。館内にはウィンストンのメモラビリアが満載。カフェテリアもあり、今ではすっかり観光地の風情である。しかしこの宮殿が、血生臭い「第零次世界大戦」の賜物であることは忘れることはできない。イギリスの立憲君主制の成立。それは、実は絶え間のない戦争の号砲だったのだ。

(おかだ しん)

女川の記憶と2111年の世界

小野展克

「この展望台は、初日の出が岬の間から昇る様子を見られるように設計されています」復興支援を担うNPO法人の担当者が、こう話した。女川駅の駅舎は阪茂氏がデザインした、ウミネコが羽ばたくイメージの駅舎で、3階の展望台から女川が一望できる。まっすぐに伸びる赤いレンガ道に沿って瓦屋根の商業施設が並ぶ。視線を伸ばすと漁船と女川湾、さらに岬の先に太平洋が望める。海は波もなく、夏の光のんびりときらめいていた。

今年8月、ゼミ生と宮城県女川町を訪ねた。13年前の2011年3月11日。東日本大震災による津波で、女川は町の大半を失った。若手中心に復興が始まり、社会システムの崩壊が、結果として女川に新たなチャンスをもたらした。漁業や観光、森林保護から住民の健康まで幅広く社会課題に挑戦する女川は、世界から注目されるようになった。

そんな女川の商業施設の外れに旧女川交番がある。津波の直撃で鉄筋コンクリートの交番が横倒しになり、鉄骨は錆び、コンクリートもひび割れ、雑草も生え放題だ。震災の遺構として、あえてそのままにしているという。その瞬間、大震災の記憶が蘇った。当時、私は共同通信の経済部デスクだった。記者数名を被災地に派遣することになり、親しい三十代の後輩記者がメンバーに加わった。車で被災地に入り現状をレポートするという。彼の目には野心が宿っていた。未曾有の大地震の現状を世に伝え、歴史に残す。これは震えるようなチャンスだ。ただ、原発事故を踏まえると、どれほど安全に配慮しても危険は避けられない。私は彼に羨望を感じ、一方で、東京の安全な場所でのデスクの仕事に安堵していた。そして、そんな自分の心根に気付いた時、記者としての欲望が失われつつあるようで愕然とした。そんな私が、13年余り後、学生たちと女川を歩いている。「この交番の遺構は百年後に取り壊すことに決まっています」NPOの方の声が聞こえた。2111年3月11日。世界はどんな姿なのだろう。好奇心のまま女川を駆け回る学生たちを見ながら、そんなことを考えていた。

(おの のぶかつ)

バビヤールの黒い闇

亀山郁夫

いつからか、**ロンドン**に収められた過去の画像を開く回数が多くなった。最近では、「マリウボリの二十日間」という映画に刺激され、二〇一四年にウクライナを訪問した際の一連の写真を振り返った。正確にはその年の九月、私は勇を鼓してウクライナに入った。彼らの心性に深く根を張る「ルッソフォビア」の実態をめぐり意識調査が目的だった。だが、本心は、といえば、ウクライナ東部で起こったマレーシア機撃墜事件での犠牲者への追悼の思い、と書いたら大げさに響くだろう。だが、気持ちに偽りはなかった。じつところ、この事件を、あたかも私自身が引き起こした事件のように感じていたのだ。 Cholノービリ原発を皮切りに、被災者救済のための人工都市スラヴィティチ、古都チェルニヒウへと足を延ばした。ガイド役のM氏の誇らしげな口ぶりから、彼が、右派セクターで呼ばれるマイダン革命の闘士であることがわかった。そして言葉の端々から、彼がひそかに私の二枚舌を疑っている様子も伺い知れた。本物のウクライナシンパか、ロシアの手先か。こうして三日間におよぶ疑心暗鬼から解放されたのが、最終日。キーウ市内にあるユダヤ人虐殺の地「バビヤール」に入ったときのことである。かつて溪谷だった場所は埋め立てられて公園となり、ロダンの『地獄の門』を象ったかのごとき慰霊碑がその中央に設けられていた。犠牲者の数は約十万人。エリ・ヴィーゼルによると、「殺戮が終わってから数ヶ月間、血の間欠泉が大地から噴き上げ続けた」という。日も暮れかかり、M氏が思い出したように「もつと深い穴がある」と言いつて案内してくれた場所があった。慰霊碑から徒歩で十五分ほど離れた深い木立で、銃殺された犠牲者が突き落とされた溪谷である。目の前の闇の前で、私たち二人は立ちつくし、沈黙を続けた。こうして、十万人の死者の霊のとりなしを得て、悲しい腹の探りあいは終わった。顧みれば、バビヤールの悲劇から今年で八四年。侵攻の犠牲者数は、二〇二四年終りの段階で四万三千人。ここにロシア兵を数え入れればすでにバビヤールの規模をはるかに超えている。

(かめやま いくお)

セーヌ川…土砂降りの「晴れ舞台」

後藤希望

二〇二四年の忘れられない風景は、スタジアムを飛び出して行われたパリ五輪開会式の舞台、セーヌ川だ。五輪開会式の選手入場行進に取って替わるパリ大会の船上パレードの資料は、セーヌ川を表象した物凄く横に長い絵巻物状のPDFで配布された。開会式の放送権を持つ局だけが事前に入手できる極秘資料は、これまで、例外なく一頁のサイズはA4だった。現場での使い勝手が度外視され、どのように見せるかが全面に出ている資料に、思わず「何これ!」と叫んでしまった。その翌日、パリ大会組織委員会T・エスタンゲ会長と開会式総合プロデューサーのT・ジョリー氏が、開会式の放送をする局だけに会見を開いた。セーヌ川とパリ市街が全貌で、五つ星ホテルの高階のテラスで行われたこの異例の会見場でも、自分達をどのように見せるかのみが際立ち、質問をしても何ひとつ新情報の提供は無く、再び哑然とした。

これまでの大会では、極秘資料を基に理解した内容、そして国際信号のカメラワークを念頭に実況コメントをリハサルで確認、精査してきた。



左:パリ2024組織委員会会長 トニー・エスタンゲ (Tony Estanguet) 右:総合芸術監督 トマ・ジョリー (Thomas Jolly)



Paris 2024 セーヌ川とパリ市街

しかし、パリ大会では、リハサルは一切無いと伝えられた。そこで、開会式の準備でセーヌ川が封鎖される前にクルーズをし、選手達が目にするであろう川沿いの風景を体感することにした。二人のディレクターは、打ち合わせ無く私を真ん中にして、両岸に見える風景を其々交互にコメントしながらデジタルカメラで録画した。私が三ヶ月前に渡したパリの街や歴史を理解するための複数の参考文献の内容を全て把握し、自分の言葉で表現している二人の姿を目の当たりにし、チームワークの神髄を痛感。セーヌ川を見ながら、若い二人を心底頼もしいと思った。開会式当日、十七時から雨が降り出した。トロカデロ広場に設営された屋根が全く無い実況席。傘をさすなどの指示が出た。隣席の女優の杏さんと共に土砂降りの中でずぶ濡れになりながら、同じくびしょ濡れの船上の選手たちに強く同情した。韓国選手団が「北朝鮮」と誤紹介された音声に重なった船上の韓国名のパネルの映像を含め、一生忘れられないセーヌ川となった。(ことう のぞみ)

あの素晴らしい夕焼けをもう一度

小堀慎悟

大学院に進学して二年目から留学に行く直前までの三年間、京都で下宿生活をしていった。自炊することの多かった私は、遅くまで院生用の共同研究室で勉強を続ける他の院生たちとは違って、だいたい十七時過ぎには大学を後にしていた。当時、下宿は大学から今出川通りを西に十五分ほど歩いたところにあったのだが、京都は景観条例のおかげで高層の建物が少なかったためか、晴れた日の帰り道にはしばしば大きな夕日に向かって歩くことになった。とりわけ印象深かったのは秋から冬にかけての夕焼けで、空気の澄んだ日やうっすらとした雲がある日などは、遠くから茜色の光が差し込んでくる様子に思わず立ち止まってしばしの間見入ってしまうこともあった。自ら選んだ道とはいえ、大学院への進学という先の見えない生活の中で、目の前に広がる夕焼けは、ともすればこみ上げてくる不安を一時でも忘れさせてくれ、明日への気力を与えてくれたように思う。

一年近くに及んだ留学から帰ってきたのは二〇二〇年の三月、待ち受けていたのは新型コロナウイルスのパンデミックであった。非常勤の仕事の関係で翌年から半年間再び京都で一人暮らしをしたのだが、今度は世界中が不安に苛まれているなかで、そんなことなど構いなしに帰り道の夕焼けは私たちを照らし続けていた。

名古屋で生活するようになって、あの夕焼けを目にすることはもうないのかもしれないと思っていた。ところが、ある日の帰り道、自宅近くの通りを歩きながらふと西のほうを見上げると、そこにはいつか見たのと同じ夕焼けが広がっていて、変わらず私や道行く人々を照らしていた。懐かしさと同時に、いま、そこに自分がいるのだという実感のようなものがこみ上げてきたことを覚えている。

人も物事も、日々変わり続ける。ただし、いつでも変わらず人々を照らす夕焼けに比べれば、移ろう我々の存在はあまりに小さい。それでもあの素晴らしい夕焼けは、小さいながらもがき続けてきた自分が、この世界の中で生きているのだという安心感を与えてくれるのである。

(こほり しんこ)

指導教員の研究室の扉

城月雅大

その扉は、まるで年深き蔭に覆われた古びた門のように、年月を経るごとに重く、威厳すら漂わせるものとなった。指導教員の研究室の扉——それは挑戦の象徴であり、恐怖そのものでもあった。「先生、私たちがは優しいのに、君には厳しいよね」。ある日の夕べ、同級生の女子が笑い混じりに放った言葉が、今も耳にこだましている。

二年生の頃、私はある決意を胸に秘めた。それは無謀とも言えた。大学の専攻とは全く異なる分野の大学院へ進む——常識的には到底叶うはずもない目標だった。だが指導教員は、長期休暇中さえも一度たりとも欠かさず、私に一对一のゼミを課した。三年間、課題が芳しくないときは無言の時間が過ぎ、一時間、時には二時間がそのまま流れた。褒められたことは一度もなかった。進学を目指す話題になると、「やめた方がよい」と諭すように語られた。それでも先生は、どこか冷たさを装いながらも、私を決して見放さなかった。

扉の前に立つたび、胸中に黒い影が差した。努力が否定されるのではないか。また、厳しい言葉に打ちのめされるのではないか。その度に、その扉は鋼鉄の如く重く感じられ、超えられない壁のように立ちはだかる。

ある日のことである。幹線道路沿い、薄暮に染まる歩道で電話をかけた。「先生、大学院に合格しました！」。電話越しの沈黙がひととき続いた。そして、「不合格」の見聞違いじゃないだろうか？。それは冗談だった。だが、その冗談めいた言葉には、確かに温かみが宿っていた。私はその瞬間を生涯忘れることはないだろう。

今、この時になって私が確信するのは、一人の人間と真正面から向き合うことの尊さである。その道は険しく、時に孤独だが、それ以上に価値がある。大学時代から私は先生の発する言葉をノートに書き留めてきた。そのノートは、私にとって失うことのできない宝物である。挫けそうなき、そのノートを開ければ、先生の言葉が静かに命を吹き返し、私の人生の風景を新たに描いてくれる。

あの重たく感じた研究室の扉。それは、今では私を育ててくれた証そのものだと感じる。そしてノートには、まだ余白が残っている。その余白が埋まるまで、先生の言葉が私を導き続けるだろう。願わくば、その言葉を紡ぐ日々が、先生にとっても健やかなものであらんことを、心より祈っている。

(しろつき まさひろ)

四角い空

竹下裕隆

奥三河にある私の実家から、以前は竜頭山という山が見えた。

「竜頭の山を仰ぎ見て」

私の小学校校歌の出だしである。作詞者が私になっているのだが、ほとんど校長先生に添削していただいたものである。そのことがずっと恥ずかしかったのだが、廃校になった母校に残る校歌碑を見るにつけ、師は自らの「名」ではなく「人」を残そうとしていたのではないか、そう思えた。私が「その人」になっているとは思えないが。その竜頭の山が、今は実家から見えない。家の前の川を挟んで向かいにある山の杉が育ったからだ。幼い頃、大学生の次兄が友人と二人でその山に植林していたのを覚えている。我ら悪童達によって、お握り山と命名されたその山は、我らの恰好の遊び場であった。時と供にお握り山の杉の子が育ち、大き過ぎるお握りになっていた。周りを見渡すと、集落を取り巻く山々の木々も当然同じである。そして、実家の「空」は、狭くなっていた。

学生時代、モダンダンスにハマっていた。自分が何者なのか、本当は何をしたいのか、腹が決まらずに悶々としていた私は、ある意味ダンスに逃げていた。本当にこの世界でやっていけるのか、この東京で生き抜いていけるのか。そんなある日、東京芝の増上寺で大師匠主催の東京創作舞踊団「四角い空」という現代舞踊を観た。若者の悲喜交々が舞台上飛び交うそのダンスの上を見上げると、そこには、「四角い空」が浮かんでいた。

「東京の空は、四角い」

強烈なメッセージが私の心を貫いた。……は私が生きていける場所なのか、四角い空に押しつぶされてしまう……そう心の中で呟いた自分を覚えていた。その「四角い空」を、狭くなった実家の空を見て思い出した。あの時、私は、自分の心の中に映った「四角い空」を覗いていたのだ。東京の空を四角い空にすることで、退路を断つて故郷に戻ってきたのだ、そんな気もする。狭くなった実家の空は、森が育ったことも伝えている。今や森は、鹿と猪の楽園であるが、もう逃げ出す訳にはいかない。

(たけした ひろたか)

バルサケルメス島と沙漠の風景

地田徹朗



筆者の研究フィールドである中央アジアのアラル海に「バルサケルメス」という名の島がある、否、かつて島があったことを知っている人は、恐らくいないだろう。島の名前、「バルサケルメス」とは、「行ったら戻って来られない」という不吉な意味をもっている。ただ、ソ連時代、一九二九年に現地では「ジェイラン」と呼ばれるガゼルの一種やサイガなどの動物が持ち込まれ、それらが定着し、一九三九年には同島に自然保護区が設定された。周囲を海で囲まれた動物の楽園が生み出されたのである。

ただ、ソ連時代のアラル海に流入する河川流域で大規模な灌漑開発が行われ、アラル海への流入水量が減ることによって干上がってゆき、一九九〇年代後半には島は半島となり、二〇〇九年には半島であることもやめた。しかし、独立カザフスタンでも「島」は自然保護区のままであり、二〇一六年にはUNESCOの「生物圏保存地域世界ネットワーク」に登録された。

二〇一七年夏、私のアラル海研究の師の一人である、ロシア科学アカデミー動物学研究所教授のニコライ・アラディン先生と共にこの「島」を訪れたことがある。殺伐とした植生に乏しい茶色をした大アラル海の旧湖底を抜けると、もちろん沙漠の中はあるが、青々とした豊かな植生が見えてくる。「島」の周りに表流水はもはやないが、恐らく地下水が豊富なのだろう。誰も今は「島」には住んでいないが、かつて使っていた建物も複数残っていて、そのうちの一つには大量のサイガの毛皮や、恐らくは気象観測の記録をしたアーカイブ資料が散乱している。ソ連時代は人が常時ここに住んでいたのだが、今やそこにあるのはすべて「過去」だ。

「島」の崖上から見える景色は青々とした海ではなく、黄金色の中に緑が点々とする砂の沙漠だ。それはそれで美しい。だが、私が好きなのは、「島」西部にある粘土沙漠（タキール）の風景である。私が訪れた時は、直近で雨でも降ったのか、地割れる粘土の上に真っ白な塩が浮かんでいた。そこにあるのは「無」。白と黄色の斑々な大地を見つめつつ、紙煙草をくゆらせ、自然の猛威に畏怖の念を抱く。それは至福の時であった。

（ちだ てつろう）

“Movin’ me down the highway”

長畑明利

大学四年になる前の春休みに、実家近くの自動車教習所に通って普通免許を取得したが、その後はいわゆる「ペーパー・ドライバー」の状態が続いた。アメリカへ留学した時も、苦学生をしていたので車を買う余裕はなく、免許もとらなかつた。帰国し、名古屋に就職してからも車のない生活が続いた。

しかし、在外研究でカリフォルニアへ行ったときは、さすがに車がないと生活できないぞと思い、新聞広告を頼りに中古車を買ひ、免許も取った。（カリフォルニアでは車がないと免許の試験を受けることができないということだったので、先に車を買った。一度試験に落ちたので、運転を指導するプロの人に依頼したら、元ヒッピーのビリーという人が来た。ビリーは教え方がとてもうまく、おかげで二度目には合格した。）免許取得後、最初は大学町の中を走っていたが、徐々に遠出するようになり、南はサンディエゴ、北はメンドシノー、東はヨセミテまで行った。大陸横断とか、砂漠の中を走って景勝地までといったことも考えたが、時間ももなく、腰も引けて、結局実行できなかった。

それでもカリフォルニアの道を走るのは気持ちがよく、そこで見た景色は忘れがたい。十七マイルドライブ、ネベンシー、ビッグサーといった海岸沿いの風光明媚な場所の光景は驚くべきものであり、まさに忘れがたい光景といつてよいものだったが、ひとつを選べとなると、バークリーからの帰路、夜のベイブリッジを渡り、トンネルを抜けてから見えてくるサンフランシスコのビル群の明かりを挙げる。ほかの記憶と混じり合っているかもしれないが、光のタペストリーの中に吸い込まれていくような感覚を覚え、興奮した。

ハイウェイを走っていると脳裏にBGMが流れる。ジム・クロウチの「I Got a Name」などが鳴っていたのだと思う。車に強い愛着があるわけではないが、あのときアメリカのあの道を走ったという記憶は貴重なものとしていまもある。

（ながはた あきとし）



フェオドシアで買った風景画

そうそう、書き忘れたが、ロシアとウクライナの戦争のさなか、フェオドシアは現在ロシア領になっている。しかし、本当はこの町はどんな国家にも領有できない。フェオドシアはグリーンランディアの町だからだ。

（ぬまの みつよし）

フェオドシア、グリーンランディア

沼野充義

グリーンランディアは実在の国ではない。アレクサンドル・グリーン（一八八〇—一九三二）が想像力で作り上げた小世界だ。彼は生涯を通じてリッス、ズルバガン、ヘル・ヒューといった無国籍の地名に彩られた、ロマンティックで幻想的な小説を書き続けた。やがて愛読者たちはこの国を「グリーンランディア」と呼ぶようになった。

グリーンはロシア文学の鬱蒼たる森の片隅で異彩を放つ一輪の花だ。僕は若い頃から彼の作品に魅せられて、彼の小説の風景の中をずうっと旅してきた。そしてある時、晩年のグリーンが住んだフェオドシアという実在の町を訪ねる機会があり、そこで本物のグリーンランディアに出会った。フェオドシアはクリミア半島の東側、黒海に面した小さな町だ。グリーンがつつましく暮らした美術館通り八番地の家は今ではグリーン記念博物館となり、いまだにここを訪れるグリーンマニアの足が絶えることはない。もう四半世紀近く前のことだが、僕がこの町を訪ねたのも、博物館で開催されたグリーン国際学会に参加するためだった（博物館にはグリーンの長編『輝く世界』の拙訳も大切に飾られていた）。多くのグリーン学者たちとの、実在する町や人物をめぐる交わされるかのような議論の熱気を冷ますために外に出れば、目の前にあるのは「アッソーリ」という名のカフェ！これはグリーンの一番有名な作品『真紅の帆』の、皆に馬鹿にされながらも奇跡の実現を信じ続けたヒロインの名前ではないか。道端で自分の描いた絵を売っている地元画家がいて、一枚の絵が気に入る、すぐに買い求めた。フェオドシアの丘の上から海を臨む風景。家々は貧しく半ば朽ちているが、木々の緑には光が蓄えられている。平凡だが、グリーンの魔法にかけられたような世界の一角だ。これはまさに僕自身がフェオドシアの丘を散歩しながら見た光景だった。

山奥の、その先に……

野川眞一郎

土砂降りの雨だった。クルマの屋根は雨傘同然のソフトトップ。ドアとの境目から太ももに水が滴り落ち続けた。民家の気配もない山奥に続く細い県道をひたすら進む。緑はますます深く、暗くなる。川のためとの三叉路を曲がる。カーナビなどない時代。「間違ったな」と確信した直後、小さな集落に抜けて息を呑んだ。雨に煙る光景は、水墨画そのものだった。三重県一志郡嬉野町小原。初めて訪れたのは、一九九五年の初め頃だった。三重は、新聞記者として四つ目の赴任地。未明の揺れで生まれて間もない長男をかばった阪神大震災からいくらか経っていない頃、何の用で山奥に分け入ったのかは覚えていない。

その後、ここへは度々訪れた。何本かの記事は書いたが、大したものはない。「行きたかったから行った」というのが正直なところだ。集落の細い道を上り詰めると、廃校になった小学校の講堂が残っていた。さらにうねうねと続く坂を進むと、斜面に茶畑が広がっていた。人影を見かけたことはほばない。川のせせらぎだけが聞こえていた。振り返ると、すり鉢状に迫る山々の底に、小さな校庭があった。クルマを止め、しばらく眺めてから帰路につくのがお決まりのパターンだった。きつと、心の芯が疲れていたのだろう。

それから三十年近くが過ぎた。あの集落は、合併で松阪市嬉野小原町になったらしい。何枚かの写真を撮ったはずだが、ネガフィルムを見つけたことはできなかった。デジカメが普及する直前の話である。

（のがわ しんいちろう）

敦煌の鳴沙山

船越達志

中国・南京大学に留学していた頃、留学生事務室の企画で計三週間の大旅行にでかけた。南京から出発し、敦煌、トルファンを経て、最終的にウルムチまで赴く旅である。文字通り中国横断の旅である。日本では見たことのないような、珍しい風景にこの三週間は毎日驚きの連続であった。その中でも特に心に残っているのが、敦煌の鳴沙山である。

南京駅を鉄道で出発したのは夜の十一時。最初の目的地が敦煌であった。当時、敦煌にはまだ鉄道の駅がなかったので、最寄りの柳園という駅で下車した。南京から柳園までは、五十時間以上もかかった。私たちが乗ったのは「硬臥」と呼ばれる寝台車で三段ベッドになっており、夏なのにクーラーもなく、あるのは扇風機だけだった。今考えると結構きつい旅だったはずだが、それよりも好奇心が勝っていたためか、さして苦にはならなかった。真夜中に柳園駅に到着し、そこから更に四時間ほどバスに揺られてようやく敦煌に到着した。敦煌に着いたのは夜明け前であった。半日休憩の後、午後から敦煌市内の見学に出かけた。敦煌は見所が多く、莫高窟、映画「敦煌」の撮影地、博物館など、興味深く見学した。「鳴沙山」は、その日の夕方に訪れた。「山」の一字がついているが、これは即ち砂漠なのである。砂漠の「砂の山」なのだ。敦煌の市内から遠くに「山」のように見えるのだが、この「山」のようなものが砂の山なのだった。驚きである。



大きな砂の山が延々と続いており、子供の頃に「アラビアンナイト」の絵本でみたような光景が広がっていた。「鳴沙山」の麓(?)には「月牙泉」という小さなオアシスもある。ちよつとお金を払えば駱駝に乗ることもできた。靴を脱いで裸足になり、砂の山をゆつくりと登った。時節は夏だったので、素足に夕方の砂の涼しさが心地よく、いつまでも砂の上にいたい気持ちであった。月の砂漠も見なかった。留学生一同思いは同じで、そのまま星と月が出るまでずっと砂の上にいた。砂漠から見上げた夜空は幻想的な光景であった。今になっても時折思い出す、忘れられない風景である。

(ふなこし めつとし)

井の中の蛙大海を知る。

真崎 翔

「井の中の蛙大海を知らず」という諺がある。本来の意味とは異なるが、その諺をありありと感じた風景の数々が忘れられない。

大学在学中に米国へ留学するまで、海外経験が全く無かった。国際線の飛行機に乗ったのは、渡米時が初めてであった。アラスカ上空を飛んでいる頃だったか、ふいに眼下を見ると、地平線まで山々が連なっていた。見渡す限り、文字通り山と空だけだったのである。北米大陸の広さに武者震いした。

留学中には、夏休みに米国を陸路で一周する旅に出た。基本的に夜行バスでの移動であったが、ニューヨークからシアトルまでは、乗り換え以外に途中下車することなく、四日間ほどかけて大陸横断鉄道で移動した。ある日の夕刻頃であったか、車窓から外を見ると、西部劇のように雑草が転がる砂漠地帯であった。風景に退屈して眠ってしまった。翌朝目覚めると、電車は夜通し走り続けていたのにもかかわらず、景色が全くと言ってよいほど変わっていないかった。米国の途方もない広さに唖然とした。

その冬休みには、メキシコを陸路で一周する旅に出た。それ自体も一冊の本になるような体験の連続であったが、別の機会に譲ろう。帰りのバスがテキサス州から米国入りし、その後何度か乗り換えた気もするが、とにかくバスは一日中走り続けた。夜になった。貧乏学生であったためホテルに泊まることができず、夜行バスに夜通し揺られ続けた。朝になった。そして昼になった。それなのに、まだテキサスであった。数日後、ようやく留学先のオハイオ州シンシナティにたどり着いたが、大寒波がきており、テキサスと同じ国内とは思えないほどの寒さであった。暖房のほとんど効いていない下宿先が、そのキッチンに備え付けられた冷蔵庫内よりも寒いくらいであった。米国は気が遠くなるほど広い。

昔、ある関係者に、どうして名古屋で米国のビザを取れないのか聞いたことがある。答えは「米国にとって、名古屋から大阪は車で移動するような距離だから」であった。その回答に納得できたのは、井の中を出て大海を知ったからである。

(まなみ しゅう)

忘れられない……でも二度と見たくもない

弓削雅人

その風景は壁に遮られて見通すことができなかった。いや、見通すことができないことが風景だった。

一九八三年夏、その風景が目の前にあった。ドイツ民主共和国（東ドイツ）領内に位置するベルリンは、東ドイツの首都と米英仏占領地域だった西ベルリンに分断されていた。外国人が西から東へ入る際の検問所「チェックポイント・チャリー」を通過しなければならぬ。西側部分を抜けると、厳しい顔つきの東側係官にパスポートを見せる。二十五西ドイツマルクを二十五東ドイツマルクへ強制両替させられた。当時の実効レートだと八〜十倍くらいの差があったが、ここでは当然一対一だ。

検問所を出た。煤けた建物の前に五十メートルおきに立つフォルクスボリツァイ（人民警察）の視線。ロックオンされていないかと不安だ。フリードリヒ通りを一キロメートルほど歩く。都大路を左折して五百メートルほど進むと、その風景に出くわした。境界への立ち入りを禁ずる柵の先にそびえるベルリンの象徴ともいえるブランデンブルク門のクアドリガを仰いだ後、目線を落とすと、門柱の向こうはグロテスクな壁に遮られ、西ベルリンはわずかに緑が覗けるだけだった。

一九六一年の壁建設を担当した、後の国家元首、エーリッヒ・ホーネッカーは「壁は五十年後も百年後も資本主義への防波堤として残るだろう」と豪語した。それを信じてか、当時東ベルリン市民だった友人は壁崩壊の一報に「西から軍隊がやってくるのではと凍り付いた」と話していたほどだ。しかし、壁は外敵から東ベルリンの市民を守る要塞として築かれたのではない。その逆に、西側へ向かう市民の止めどない流れを堰き止めるために築かれた。越境を図って失われた命は子どもも含め百三十人以上にもなる。逃れたにもかかわらず、一緒に越境を試みた恋人の死を悔やんで自殺した人もいた。

ホーネッカーの言うようにはならなかったが、彼が作った風景は現実私の前にあった。いま、あの風景はない。忘れられない風景が二度と見えない風景というのも歴史の皮肉かも知れない。

（ゆげ まさひと）

広島（二〇二四年六月）

吉見かおる

二〇二四年六月末、その月三人目の教育実習生訪問のため、広島に向かった。長野、静岡と続いた毎週の移動はさすがに堪えたが、訪問先ではにかみ先生の姿で再会するゼミ生を前に、やっぱり嬉しかった。大学一年の頃から授業を通してよく知るこの学生の実習訪問は、特に楽しみにしていた。「お薦めのお好み焼き屋さんはどこですか?」そんな冗談じみた会話がいつもの調子だったが、この学生との長らくのやりとりのなかで、「広島的な人々」の何かをいつも感じ、広島をもっと知りたくなった。

無事に研究授業を参観し終え、昼食は宿泊ホテルの裏地にあるごちんまりとしたお好み焼き屋を選んだ。鉄板焼きに興味津々の大きな体をし海外的な観光客五人家族が何とか動画を撮ろうと、カウンター越しでカメラのような恰好になって座っていた。お会計の時、小柄な老女のオーナーが「どちらからお越しですか?」と声をかけてくださり、「愛知県名古屋です」と答えると、「まあ、嬉しい」と言いつて、今の広島（特に昨年のG7サミット以降の広島）について、また戦後直後のことまで語ってくれた。「昔の広島が懐かしいわね」と、最後にひっそり添えられた。

翌日は、広島平和記念資料館を訪問した。予定は一時間。それだけあれば十分だと思っていた。ざわつく入口で世界各国の人々と一緒に並び立ち、すべてを見終えたのはそれから二時間半後。ものすごい人だかりなのに、誰一人列を乱そうとせず、子どもから大人まで完全な沈黙で、そこは国籍が消えてしまう不思議な空間だった。

資料館で、もう一人の広島的な人と出会った。被爆体験の伝承講話を務める河野勉子さんである。一九四五年八月六日、生後四ヶ月の赤ん坊だった河野さんは、広島駅のベンチで母親におしめを替えてもらっていたところ、その時に被爆された。木製ベンチの僅かな背もたれが、この赤ん坊の命を救ったという出来事を、河野さんは穏やかな口調で、史実をしつかりと組み込みながら、七名ほどの聴衆の前で話された。あの優しさに溢れる微笑はどこから来るのか。帰りの電車の中でずっと考えていた。きっとそれは、広島的な人々の秘密なのだと思う。

（よしみ かおる）

地球に降り立ったエイリアン

渡邊克昭



グランドキャニオンの淵に佇んだのは、まだ学部生の頃、はじめてアメリカを訪れたときだった。人間の営みを凌駕する壮大なスケールで眼前に広がる赤茶けた岩肌、圧倒的な存在感をもつ地球という惑星の地質学的時空を惜しげもなく曝け出していた。まさに「崇高」としか呼びびようのない大自然のパノラマを前に、言葉失って立ち尽くしたのを今でも鮮明に記憶している。翌日、セスナ機で上空から俯瞰してみた。悠久の時間を経て地殻変動がもたらした巨大な地層群は、いかなる額縁にも収まるはずもなく、地球カレンダーにおける人類の矮小さを痛感させられた。

とはいえ、地球温暖化や様々な災厄を通して、人類がこの惑星のありように決定的な影響を及ぼしつつあるという認識が深まった現在、「人新世」という地質学的年代区分がほぼ定着しつつある。このような状況において、地球システムはグランドキャニオンを通して何を語りかけているのだろうか。哲学者デボラ・ダノウスキーと人類学者エドゥアルド・ヴィヴェロス・デ・カストロは、共著『世界の終わり』の中で、「人新世」は「われわれとともに始まったが、われわれのいないところで終焉を迎えるだろう」と述べている。

地球を一つの有機体、生命体とみなす環境科学者ジェイムズ・ラブロックも警告するように、「地球の復讐」により、人類は絶滅への道を突き進んでいるかのようなのである。だとすればわれわれは、大地と地続きの存在であることに目覚め、「地球に降り立つ」の著者ブルーノ・ラトゥールが言うように、「大地に根ざすもの」すべてと共生するネットワークを組み直すべき地平に差し掛かっている。

このような視座に立てば、あの剥き出しの峡谷は、四十六億年のジオ・ヒストリーを誇る惑星が、加速度的に進化を遂げる人類など歯牙にもかけず、自らの「深い時間」を表土に刻んだ記念碑のランドスケープのように思えてならない。思い返せば、あのとき自分は、地球に降り立ったエイリアンさながら、存在論的不安を抱きつつ、人類なき後の地球を幻視していたのかもしれない。

(わたなべ かつあき)

Women's Football on the Rise

Yasutaka Imai

When we think of unforgettable landscapes, we usually picture rolling hills or vast coastlines. However, the most memorable views I have seen were actually in a busy pub and a packed football stadium, where the sound of cheering fans resembled a giant wave. Through these roars and goals, I witnessed a powerful change in society.

Many people agree that there is something incredibly exciting about watching a live match in a crowded venue, surrounded by people chanting in unison. However, if you believe I am talking about men's football, you would be mistaken—I am actually referring to women's football.

My first taste of this excitement was in a bustling pub in Portsmouth during the 2023 FIFA Women's World Cup final, where England faced Spain. Although the Lionesses lost 1–0, the atmosphere was thrilling. Strangers gathered around tables, giving each other high-fives at every near miss and groaning together at each wasted chance. The passion was real, showing just how much women's football has grown.

What surprised me most was the large number of female supporters, from young girls proudly wearing kits to older women who had waited for years to see the women's game gain the recognition it deserves. Men also wore shirts with the names of famous female players—a clear sign of changing

attitudes. When the final whistle went, the crowd felt both disappointment and pride in how brilliantly the team had played.

Half a year later, I witnessed another unforgettable match in a stadium in Melbourne: the CommBank Matildas' Olympic Qualifier, where they won 10–0 against Uzbekistan. The stands were full of fans of all genders, but, once again, what stood out most were the many mothers, young girls, and entire families who made the stadium feel welcoming. A crowd of 54,120 people watched the Matildas display skill, determination, and teamwork, bursting into cheers with every goal.

Seeing these two events made me realise how big women's football is growing. Plenty of people are already hooked, but if you haven't been to a women's match yet, I suggest you give it a try. Watch these talented athletes and their dedicated supporters in action, and I promise you'll be amazed.

Female footballers have shown they can compete at the highest level and attract large crowds. They deserve equal funding, media coverage, and opportunities. By giving women's sports the same support as men's, we can inspire the next generation to aim higher, train harder, and break any remaining barriers.

(イマイ、ヤスタカ)

Unforgettable scenery

黎敏

Upon seeing this topic, among countless unforgettable landscapes, the first to emerge was the church in Sønderborg. Sønderborg is a seaside town in Denmark, but its views are unforgettable, especially the tallest red-roofed church, which my room's window faces. The music of the church clock can be

heard every hour. What I like best is its summer appearance. Against the backdrop of the clear blue sky, its simple silhouette appears particularly beautiful.

On my first night in Sønderborg, after finished the Mid-Autumn Festival party organized by Chinese students around 10 pm, I got lost. Unfortunately, my mobile network had not been set up yet. In my anxiety, I thought of the church across from my house. Finally, in that fairy tale world, I did find this church. Due to this interesting experience, the scenery of the church is still vividly preserved in my memory.

(レイ, ビン)



2015 with friend in Sønderborg

Paradise for Some

Philip Rush

42 kilometres from the south-western tip of England lie the Isles of Scilly; five inhabited islands, a hundred or so islets, a total population of around 2,000. For hundreds of years this hardy group of people struggled to survive in any way they could, living off what they could catch from the sea, conserving extremely limited water supplies from a few wells, harvesting seaweed to sell at a meagre profit. A distant landlord paid little attention to them, and the outside world ignored them or were unaware of their existence.

My maternal grandfather's business had folded in England. A family of five with three small children, they were destitute and homeless. It was 1940, wartime. These insignificant islands were at an important strategic location, and a military presence was needed. My grandfather took the position of coast-guard, watching for enemy ships or planes: so my mother and her siblings found themselves on St. Martins, a two-kilometre long, half-kilometre wide strip of granite and grass and home to around 70 souls.

After the War this family had to find ways of supporting itself. There was a tiny flower industry; the sub-tropical climate of the islands allowed farmers to grow flowers in the winter and send them to London markets. Big trawlers from Europe had not yet arrived to clear out the local fish stocks, so fishermen could eke out a living. Tourism had not yet reached the islands; no mains water or electricity and a lack

of buildings meant that few visitors came. Young people left the islands in search of work, and the already sparse population dropped. Finally permission was given to local people to construct simple chalets on their land, and tourism became a lifeline for survival. My grandfather started a small shop and Post Office, and they settled in to their new life.

The islands are beautiful; unspoiled by mass tourism because of the limitations of size and facilities, the white sandy beaches and spectacular landscapes are some of the most breathtaking sights in the UK. But the tourist season is short. Access to the islands by ferry is for only half the year, and the tiny planes that can land at the airport are very expensive. Local people have to charge high rates for accommodation and services, so the visitors tend to be well-heeled. A few campsites cater for less affluent families, but it is still an expensive holiday. Yes, the landscapes are unforgettable for those who visit, but it is important to remember that beauty has a price: it is still a struggle for the locals to provide the services that visitors need and expect.

(ラッシュ, フリップ)



Un décor de Western dans une île de l'Atlantique Laurent ANNEQUIN

Grâce au travail de mon père, propriétaire d'une petite société du bâtiment, j'ai eu la chance, lorsque j'étais enfant, de pouvoir voyager en famille chaque année pendant les vacances d'été. L'une des destinations qui m'ont le plus marqué fut les Canaries. Cet archipel espagnol, situé au large du Maroc dans l'océan Atlantique, est composé de plusieurs îles à l'atmosphère très différente l'une de l'autre. Si bien que nous y sommes retournés trois années de suite. Nous sommes allés en premier à Tenerife, l'île principale puis à Lanzarote et finalement à la Grande Canarie.

Mon premier voyage remonte à 1976. J'avais alors seulement neuf ans, mais les paysages de Tenerife sont gravés dans ma mémoire à tout jamais. Il y a sans doute une raison à cela. À cette époque-là, le mardi soir, comme il n'y avait pas école le lendemain, j'avais le droit de regarder la télévision jusqu'à tard dans la nuit. Des westerns y étaient souvent diffusés, et j'en étais un fervent amateur. Ces films d'aventures regorgeaient de personnages hauts en couleur, de tireurs d'élite, de courses de chevaux et de paysages désertiques avec des montagnes aux formes incroyables. À cette époque, l'engouement des enfants pour les westerns était palpable en France. Nous aimions jouer aux cowboys et aux Indiens, et ma petite tente en forme de tipi ajoutait à l'illusion. Avec mes parents, nous allions à la Mer de Sable, un parc d'attractions situé à Ermenonville, à 45 minutes de Paris. Ce parc proposait des spectacles de Far West en plein air : attaques de diligences, charges d'Indiens

à cheval, duels aux pistolets... C'était une expérience saisissante pour un enfant de mon âge.

À l'école également, nous chantions des chansons de cet univers comme « Ani Kuni Chaouani », une comptine amérindienne que nous avions même enregistrée sur un 45 tours. Quelle ne fut donc pas ma surprise lorsque notre bus est arrivé dans le parc national du Teide où est situé l'un des plus hauts volcans du monde. Dans ce décor désertique, je me suis senti comme projeté dans un western. J'étais émerveillé tant les décors étaient à couper le souffle. Je me souviens tout particulièrement du Roque Cinchado, un monolithe massif de derrière lequel je m'attendais à voir surgir au galop une tribu d'Apaches ou de Sioux en colère. Dans ma tête, je me faisais tout un film. Cependant, lorsque le guide qui nous accompagnait nous a expliqué que plusieurs longs métrages célèbres, dont des westerns, avaient été tournés dans ce décor grandiose, j'ai mieux compris mon sentiment. Comme quoi, l'imagination d'un enfant rejoint parfois la réalité des adultes.



(アスカン, ローラン)

Échos de l'enfance au bord de la Méditerranée PACCOUD Jérôme

Lorsque j'étais enfant et adolescent, durant les longs mois d'hiver, mes parents et moi avions l'habitude de fuir le froid et la neige de nos montagnes pour passer les vacances d'hiver dans le sud de la France, plus précisément dans le département du Var. Déjà passionné de vélo pour le sentiment de liberté qu'il me procurait, je me souviens de ces premières journées ensoleillées aux températures encore fraîches où je parcourais les petites routes pittoresques qui longeaient le littoral, m'offrant ainsi un spectacle inoubliable. À vélo, tous mes sens étaient en éveil. Mes yeux s'émerveillaient devant la beauté de la mer, aux reflets variant du vert émeraude au bleu profond, à l'argenté que le soleil laissait danser sur les vagues, le tout sous un ciel d'hiver d'une pureté éclatante.

La lumière du soleil jouait sur les vagues à chaque instant, tandis que ma peau ressentait les alizés et l'air marin sur mon visage. L'odorat était également de la fête puisque l'air iodé et vivifiant de la côte emplissait mon nez puis mes poumons. J'étais exalté, ayant la sensation d'être en parfaite harmonie avec la nature.

Après une brève ascension m'amenant à quitter des yeux la Méditerranée, je découvrais soudain, au détour d'un virage, un panorama exceptionnel sur un golfe ou une crique en contre-

bas. Le parfum des pins parasols, absents de ma région natale, m'enivrait. Et de manière inattendue, mes oreilles se régalaient du doux carillon des cordages s'entrechoquant contre les mâts des voiliers lorsque la route sinueuse se rapprochait d'un des nombreux ports de plaisance de la région.

Les jours où le vent soufflait trop fort et où les conditions climatiques ne permettaient pas d'explorer le littoral et l'arrière-pays à la force des mollets, je me rendais sur une plage de sable fin, souvent déserte en cette saison. J'en profitais pour laisser le vent marin guider mon cerf-volant dans des figures aériennes. Cette symbiose avec les éléments et la beauté de la nature transformaient ces instants de solitude en une véritable fête. Pourtant, ces moments étaient parfois ponctués de rencontres. Je croisais occasionnellement des amoureux ou des habitués du lieu : promeneurs, familles, jeunes couples, enfants ou personnes accompagnées de leur chien. Il arrivait que nous échangeons quelques mots sur la puissance des vagues, du vent ou parlions simplement de la splendeur des paysages.

Ce n'est pas sans une certaine émotion que je repense à cette communion avec la nature et ces instants passés, qui, plus de 30 ans plus tard, demeurent gravés dans ma mémoire.

(ハク, ジェローム)